

公益財団法人 檜の芽会 御中

伴走型就学・学習支援活動助成 実施報告書

【団体の概要】	①作成日	令和 6年 5月 7日	
②法人・団体名	寺子屋シアン（岐阜県・本巣市地域おこし協力隊）		
③所在地	〒501-1235 岐阜県本巣市神海 715-2		
④責任者氏名	河合 達郎	(役職名等)	代表
⑤担当者氏名	河合 達郎	(役職名等)	代表

【奨学活動の概要】					
⑥助成交付決定番号	R05-010	⑦助成金額	30万円	⑧申請カテゴリー	A
⑨奨学活動名	中山間地における「教育環境格差」解消に向けた学習支援活動				
⑩主な実施場所	岐阜県本巣市・樽見鉄道神海駅				

⑪活動内容とその成果の概要（詳細は【様式3-2】又は別添資料にて記載・説明ください。）

中山間地の小規模校区で、中学生および小学生向けに学習の場を提供しています。学習塾がなく、当地の親子には「補足的な学びの場へのアクセスが困難」という悩みがありました。生まれ育った場所によってぶつかる「教育環境格差」の解消を目指し、本助成期間中は計105回開講しました。

本助成により、2つの成果が得られました。1つは、支援体制の強化です。中山間地では講師役となりうる大学生らが周辺におらず、支援員確保の面でハードルがあります。本助成の支援により、有償ボランティアとしての講師役を積極的に募ることができました。開講当初から支えてくれている若手林業家に加え、地元ケーブルテレビ局キャスターや岐阜大学生に協力いただきました。もう1つの成果は、利用者の拡大です。中学卒業に伴い、今年度当初は4人でスタートしましたが、2024年3月末時点で10人になりました。寺子屋シアンはローカル線・樽見鉄道の旧駅舎をお借りして開いており、この鉄道を利用し、当地よりさらに山あいの地区から3人が通ってきています。また「高校生が学べる場所もない」との悩みを聞き、新たに受け入れを始めました。そのほか、不登校だったり、日本にやってきたばかりだったりという生徒もいます。本助成の支援により、よりきめ細かい対応ができるようになったと考えています。

⑫奨学活動の定量的把握（注：統計情報として参考まで把握するものです。活動成果等は上段⑪及び様式3-2等でご報告願います。）

支援対象	延べ人数 (A:人)	平均時間 (B:時間)	活動量 (A×B)	備考・補足
中学生等	333	2.5	832.5	
高校生等	46	2.5	115	
大学生等	0	0	0	
学習支援員等	226	2.5	565	講師役支援員として（大学生支援員含む）
その他	60	2	120	小学生利用者
合計			1632.5	

⑬その他の定量的な数値（任意）

令和 5 年度 伴走型就学・学習支援活動助成 実施詳細報告書

奨学活動名：中山間地における「教育環境格差」解消に向けた学習支援活動

法人・団体名：寺子屋シアン（岐阜県・本巣市地域おこし協力隊）

作成者 氏名：河合 達郎

1. 取り組んだ課題や実践した目的・実施内容について

■中山間地の「教育環境格差」に一矢報いたい

寺子屋シアンは 2022 年 5 月、岐阜県本巣市の中山間地における小中学生の放課後の学び舎として開講しました。当地は全校児童 32 人（2024 年 4 月現在）の小学校区で、周囲に学習塾がありません。最寄りの学習塾までは車が唯一の移動手段となり、片道約 20 分かかります。平日の夕方・送迎の往復となると保護者の負担は決して軽くなく、ここで暮らす親子には「学校外の補足的な学びの場へのアクセスが困難」という悩みがありました。

この寺子屋を始めようと思ったのは、代表自身が本巣市地域おこし協力隊として活動する中で、実際に保護者からこうした悩みの声を聞いたのがきっかけでした。この悩みを、生まれ育った場所によってぶつかる「教育環境格差」ととらえ、そこに一矢報いることを目指して取り組んでいます。



樽見鉄道・神海駅の旧駅長室にあるシアン



神海駅の一帯は山あいで田畑に囲まれている

■「山あいで生まれなければ…」そんな思いをさせないために

地域に民間の学習塾がないという状況は、単なる「地域差」ではなく、是正が図られるべき「格差」であるととらえています。その理由は 2 つあります。

1 つは、学校外の補足的な学びの場が「インフラ」ともいえる状況になっているからです。文部科学省「子供の学習費調査」（2021 年度）によると、全国の公立中学生の通塾率（「学習塾費」の支出率）は 70% を超えています。学校外での学びは特に学年が上がるにつれて必要不可欠なものになっています。この調査は、人口規模が小さい地域ほど通塾率が低いということも示しています。少なくとも「ここで生まれたから希望がかなわない」ということがないよう環境整備がなされる必要があります。

2 つ目の理由は、この学びの差が、子どもたちのその先の人生をも左右しかねないということです。教育格差の専門家である松岡亮二氏は、著書『教育格差－階層・地域・学歴』（ちくま新書、2019）の中で「この社会に、出身家庭と地域という本人にはどうしようもない初期条件（生まれ）によって教育機会の格差がある」「この機会の多寡は最終学歴に繋がり、それは収入・職業・健康など様々な格差の基盤となる。つまり、20 代前半でほぼ確定する学歴で、その後の人生が大きく制約される現実が日本にはあ

る」と指摘しています。

2021年の流行語大賞に「親ガチャ」という言葉がノミネートされましたが、子どもたちが「恵まれた地域」と「そうでない地域」とを選別して生まれてくることができないという宿命は「地域ガチャ」と言い換えることができると考えます。

以上のような問題意識が、寺子屋シアンにはあります。

自然が豊かで、人があたたかい。ここ岐阜県本巣市北部は、子どもたちが育つにあたってとてもいい環境がある田舎です。ですが、“学校を一步出ると、お互いに切磋琢磨し合って学ぶ場がない”。その1点のために「この山あい生まれなければ…」と後悔してしまうことがないよう、地域の子どもたちをサポートしていきたいと考えています。

2. 実施した奨学活動の詳細

■ローカル線・無人駅を3時間開放、2卓のテーブルを異学年が囲む

寺子屋シアンは、ローカル線・無人駅の旧駅長室スペースをお借りして開いています。開講日時は平日週3日・17:00~20:00で、保護者の送迎負担を考慮し、時間内であれば自由に利用できるようにしています。本助成期間（2023年7月~2024年3月末）で105回、23年度全体で140回の開講となりました。2023年度当初は、利用生徒の中学卒業に伴って4人からスタートしましたが、2024年3月時点では10人（小学生2人、中学生7人、高校生1人）が通うようになりました。これまで小中学生を対象としていましたが、「高校生が学べる場所もない」との悩みが寄せられ、2023年秋から新たに受け入れを始めました。



2卓のダイニングテーブルで学ぶ子たち



小中高生の学習を講師役がサポート

学習形式は「個別型」のスタイルです。子どもたちは自ら持ち込んだ学校の宿題や寺子屋で用意した教材にそれぞれ取り組み、講師役となる支援員がサポートする体制です。

こうした学習支援のあり方は、この間、試行錯誤を続けて現在に至っています。寺子屋シアンは、旧駅長室の中で、2卓のダイニングテーブルをみんなで囲んで学ぶスタイルです。そのテーブルには、小学生から高校生まで幅広い学年の子が集います。学年が違う子たちが一堂に会するというのも小規模校区の特徴だと言えますが、これだけ学年が違っていると、どうしても集中力の差があります。そのため、空間としていかにメリハリを保ち、一人ひとりにより充実した時間を過ごしてもらおうかということが課題の1つだと感じていました。

■繰り返す試行錯誤…オンライン教材は格差解消の“万能薬”にあらず

この課題に対しては、主に2つの対策をしました。

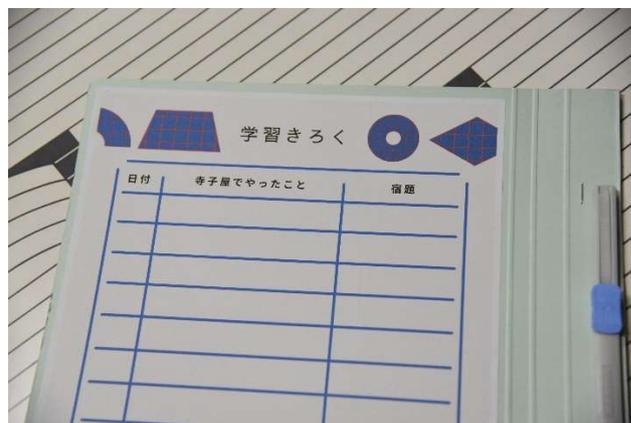
1つは、みんなで一斉にとる休憩時間を、3時間の中で1回設けるようにしたことです。個別型のスタイルで、かつ来る時間・帰る時間も異なるため、以前は一斉での休み時間は設けていませんでした。ですが、小規模校区の特性上、異学年でもみな仲がよく、友だちと会えることが寺子屋シアンに来るモチベーションになっているような子もいます。そこで、みんなでワイワイできる時間を用意し、切り替えて取り組めるよう休み時間を設定しました。

休み時間には、寺子屋で用意したお菓子を食べることができるようにもしています。宿題やテストの結果に応じたポイント表を作り、子どもたちがそれぞれたまったポイントに応じて“お買い物”できるような仕組みにしました。当地には、周辺に駄菓子屋もありません。「自分のおこづかいで、好きなお菓子を買って食べる」ということに近い体験ができるようにという狙いです。利用する子どもたちや保護者にも浸透しつつあり、最近ではお菓子やジュースを差し入れてくださる方もいます。

もう1つの対策は、子どもたちそれぞれの学習ファイルを導入したことです。一人ひとりに専用のフラットファイルを作って渡し、その日寺子屋でやったことを記録したり、プリントをはさんだりできるようにしました。寺子屋に来る際には毎回、持ってきてもらうようにしています。現在は、講師役の支援員が子どもたち一人ひとりの進捗を管理している状態ですが、本当はそれぞれが進み具合を意識し、自分の学びを振り返りつつ、自らコツコツと進められるようになるのが理想です。少しでもその一助になればと、学習の積み重ねを子どもたち自身で確認できるようにしました。また、保護者の方に寺子屋での学びの様子が伝わればという狙いも込めています。



一人ひとり専用の「学習・宿題ファイル」



寺子屋での学びを記録する管理シート

こうして大小さまざまな対策や工夫をしているとはいえ、支援のあり方はまだまだ試行錯誤の過程にあります。「できるようになるまで、毎回同じ単語テストをしてみてもどうか?」「学校の問題集の進捗も把握して、テスト対策に生かそうか?」。講師役の支援員とこんな意見交換をしながら、より充実した環境づくりに向けた打ち手を模索しています。

この寺子屋の開講前は、オンライン教材が地域間格差を解消してくれると思っていました。子どもたちは、どこにいても一流講師による良質な講義を受けられる。中山間地で講師役の確保が難しくても、パソコンがそれを代替してくれる。感染症の拡大により、図らずもそんな環境が整った――。そう考えていましたが、残念ながら現実はそう単純ではありませんでした。バリエーション豊富なコンテンツの中から、自分がいま取り組むべき素材を選び出して学ぶというのは、学習習慣が定着しきっていない子どもたちにとっては極めて難しいことなのだというのを痛感しました。支援員の存在は、子どもたち

それぞれの学びをサポートするうえで欠かせません。寺子屋シアンでは、開講以来オンライン教材を取り入れ、現在も続けて活用していますが、教育環境の地域間格差を解消する“万能薬”ではないということは強く感じているところです。

元文部科学官僚・寺田拓真氏は、著書『教育改革を「改革」する。』（学事出版、2023）において、ICTを用いた“個別最適な学び”は「子どもたちの間の格差を広げる恐れがある」という副作用の存在を指摘しています。支援員によるサポートの重要性をさらに実感しているところです。

3. 本活動から得られたもの、反省点、課題、今後への発展性、等

■今期の成果：「支援員」と「利用者」の広がり

本助成を受けた今期の成果は、大きく2つあります。1つは支援体制の強化を一步進められたことです。中山間地には、講師役を担ってもらえる大学生らが周辺にいません。中山間地は「条件不利地域」とも言われますが、学習支援の講師役を募るということにおいても、市街地に比べて条件は不利です。子どもたちへの支援体制をしっかりと整えることが課題であり、本助成の支援を受けたいと考えたのもこのためでした。

寺子屋シアンには、開講当初から20代の林業家の方がサポートに来てくれています。彼は隣町の山あい出身で、寺子屋開講の話聞きつけ「自分も中学時代、塾に通えず苦い思いをしたので…」と協力を申し出てくれました。そして本助成を受けた今期は、地元ケーブルテレビ局キャスターの方が、新たに定期的に力を貸してくれるようになりました。また、中山間地に関心のある岐阜大学生らも、スポット的ではありますが応援に来てくれました。

もう1つの成果は、利用してくれる子の広がりです。前述の通り、2024年3月現在の利用者は10人にまで増えました。人数が増えたことに加え、来てくれる子の地域が広がりました。寺子屋が位置する小学校区だけでなく、さらに山深い隣接の小学校区からも新たに3人が通ってくれるようになりました。両地区は樽見鉄道でつながっており、この寺子屋が旧駅舎スペースで開かれていることから、アクセスできると判断いただいたようです。

寺子屋シアンに地域外の子が来てくれるようになったことで、地域内の既存の利用者にとっても刺激になっています。同じ学年の子が入ってきたことによって、小テストを競い合ったり、教え合ったりする場面が見られるようになりました。小規模校区では、子どもたちはどうしても周囲から受ける刺激が限定的になります。人数は少ないながらも、お互いに刺激し合いながら学べる居場所でありたいというのが、開講当初の思いの1つでした。また、普段は学校に通えていなかったり、海外から日本にやってきたばかりだったりという子も来ています。違う学校だけれど、お互いに山あいの小規模校区で過ごす、そんな同じような境遇の中で暮らしながら、より多様な子たちと交流できる環境が、少しずつではありますが、できてきたのかなと思っています。

■反省点と展望：「ここで生まれてよかった」にたどり着きたい

山あいに生まれ育ったことで将来の選択肢が狭まってしまうことがないようにという狙いで始めた寺子屋シアンですが、まだまだ理想とする環境には遠い状況だと思っています。支援体制をより充実させ、継続性を高めていく必要があると感じています。

本助成により、講師役支援員の拡充を一步前進させることができました。ただ、目標としていた「子ども2人：講師役1人」という状態に達していない日も数多くありました。学びの環境を安定させるためには、より幅広い方の支援を求めなければなりません。支援員の募集に向けてはチラシを作成し、大学の先生や鉄道会社を通してお願いをしています。今後も積極的に動いていきたいと考えています。



活動を紹介いただいた本巢市広報（23年12月）

樽見鉄道・本巢駅に掲出した支援員募集案内

また、代表の地域おこし協力隊としての任期が2024年3月末をもって満了となります。寺子屋シアンはこの協力隊活動の一環として取り組んできていましたが、今後はこの枠組みでの支援が受けられなくなるため、基盤を強化する必要があります。そこで、この寺子屋運営の基盤となる法人を、2024年3月に設立しました。地元市議の方、企業経営者の方とともに「一般社団法人山学（やまなび）」を立ち上げ、寺子屋シアン の運営を始めています。これまで協力隊制度の中で支援をいただいていた本巢市においても、今後の支援のあり方を検討していただいています。

一般社団法人山学の中では、これまでの寺子屋運営を続けていくと同時に、山あいで暮らす子どもたちの居場所づくりにも取り組んでいきたいと考えています。これまでの活動でもご協力・ご助言をいただいた岐阜大学地域科学部・南出吉祥准教授が共同代表を務める「一般社団法人ぎふ学習支援ネットワーク」が2023年11月に開いた研修会『「子どもの居場所」の多様な姿』に参加しました。滋賀県で子どもの居場所づくりに取り組んでいる団体の活動紹介があり、子どもたちが「何もしない・何かをする必要がない」居場所の必要性を強調されていました。ここ本巢市北部の中山間地には、子どもたちが放課後に気軽に集まれる公園がありません。小学校の全校児童32人のうち大半がスクールバスで登下校するため、自然発生的に友だちが集まり、鬼ごっこをして遊ぶというようなことも難しい環境にあります。そこで、地域の子どもたちを中心に、高校生や大学生らも集える居場所が整備できたらと考え、子ども・地域食堂「コボちゃん食堂」の取り組みも始めました。

前出、松岡氏の『教育格差』では「大卒ロール（役割）モデルとの交流・ネットワークの形成、それに大卒を前提とする規範の内在化などが大学進学への期待を持つことに繋がると考えられる」とも指摘されています。ロールモデルになりうる大学生らが周囲に極めて限定的な山あいにおいて、そうしたセンパイたちと交流する居場所にできればと考えています。

4. 本活動におけるエピソード、思い、感想、等（任意）

■「中山間地の無人駅に明かりを灯す」ことの意義

寺子屋を開講し始めた当初、ある地域の方が「夜は真っ暗だった駅舎に、電気が付いた」とおっしゃって、山あいの無人駅に明かりが灯ったことを喜んでくださいました。

2024年1月、本巢市と周辺自治体の5市町から9人の市町議会議員が来られ、懇談する機会がありました。当地と同様に中山間地を抱える町議の方が「廃校となった小学校が不登校特例高校として生まれ変わり、地域住民が『学校のチャイムが戻った』と喜んでいた」というエピソードを紹介してくれました。時代の流れで無人化された旧駅長室を再活用し、子どもたちとともに明かりを灯すということにも、同じ意義があるのだと自負しています。

特に、この旧駅長室スペースは、かつての地域おこし協力隊員と地域の方々が一緒になって、みなさんで集えるようにと整備された場所です。このスペースの周囲や天井は、春夏秋冬を感じられる手づくりの民芸品や絵葉書、写真で埋め尽くされています。地域のみなさんが年間を通してここに集い、楽しんで活用をされてきたその名残が感じられます。

こうした空間で学ぶということは、いまここに通う子どもたちにとっても、おそらくこの先ない経験です。いまの子どもたちに実感はないかもしれませんが、きっと成長したときに、この旧駅長室が持つぬくもりに気づいてもらえると思います。



明かりのついた神海駅の旧駅長室



子どもたち同士で教え合う姿も

2023年12月には、国立社会保障・人口問題研究所が将来の人口推計を発表しました。「2050年には東京を除くすべての道府県で人口が今より減り、このうち2割は30%以上減る」（「NHK NEWS WEB」より）と報じられています。

東京一極集中の是正に向け、国が旗を振った「地方創生」から2024年でちょうど10年になりますが、今後も地域から人は減っていき、東京一極集中の流れは続いていくことが示されています。こうした中で、地方や中山間地における教育の地域間格差はもっとスポットライトがあてられるべきだと考えます。そして、地方で生まれ育つ子どもたちをもっと押し上げていく必要があると考えます。岐阜県本巢市における寺子屋シアンの活動だけでは、どうしても支援できる子どもたちの数は限られてしまいます。こうした問題意識に基づく活動が全国各地で展開されればよいなと思っています。



利用者に配布するカレンダー Supported by 椋の芽会